

真宗手記(安政大震災)の解読

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加茂, 豊策 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024717

真宗手記（安政大震災）の解説

加 茂 豊 策

1. はじめに

本年（2011年）3月11日「東北大震災」が発生し、大津波により多くの人命が失われた。しかし伝承された「テンデンコ」に従って高台に避難して無事だった人達も多かったことが報道された。

伝承や古文書として残されている地震や津波の、その地方特有な具体的自然現象や避難方法などを検証し、学んでおくことは今後の地域防災に役立つと考える。

遠州地方では発生した古地震のうち、明応の古震災は「円通松堂禪師語録」に、安政の古震災は「真宗手記」にその震災の詳細が記され、残されている。

後者「真宗手記」は大倉戸村（現湖西市）東新寺住職真宗が発生した地震及び襲来した津波の詳細を見聞記のごとく「かな書き」で分かりやすく説明している。そして東新寺檀家衆の自治会組織「コウジンサマ」年番交代の際「真宗手記」原文書が重要書類として文箱に収められ、確認され、伝えられてきた。しかし2001年頃この貴重な文化遺産・伝来原文書が所在不明となった（浜松地方の古文書研究者には原文のコピーが保存されている）。

この「真宗手記」は地域の知識人に解説され、様々な形で地方誌に紹介されている。

静岡県（1996）にはこの見聞記が「安政大地震並大津波記録」と題する手記として紹介され、解説者が原文と解説を併記して説明している。しかしこの静岡県（1996）の自然災害誌に掲載されている解説内容には疑問点が多数認められる。原文書（2001年現認）は保存状態が極めてよかったため虫食いや汚れは認められず、欠字や読解不能箇所は認められなかった。しかし静岡県（1996）の解説では原文に欠字があったり、読字不能箇所があるように記述されている。また解説・解釈では住民の動きと自然現象（地鳴・震動）を混同したり、刻の解釈を間違えているなど従い難い疑問点が多い。

今後「東北大震災」発生に伴って、歴史震災の研究や地震や津波に関わる地域学習会等で、安政地震・津波の詳細が検討される機会が想定されるので、正しい解説や解釈が為され、広まることを願い、自らの解説を付図も加えて公表することにした。

本書では、自著「浜名の渡りと鎌倉への道」（加茂，2001）刊行の際撮影してあった原文書を分割して資料とした。

解説にあたり、浜松市博物館内古文書研究会から多大な指導・助言を拝聴した。

2. 該当区域の成り立ちと概略

(1) 地形：浜名湖西方の湖西市・豊橋市南部には洪積世台地が広がる。県境「境川」より東は高師山丘陵、愛知県側（豊橋市・田原市）は天伯原丘陵という。両丘陵共西を向いて「へ」字形をして、
浜松市西区雄踏町字布見 9552-7

雨水は北に流れる。南側は海食崖となり、その崖上は潮見（魚群の到来）の丘になっている。

湖西市側の坂上はどこも「潮見坂」である。愛知県側は断崖になっていて地元では「崩^{ほうべ}辺」と呼んでいる。

この洪積世台地の南側には沖積低地がほぼ東西に細長く存在する。天竜川から流れ出た砂礫が沿岸流で運ばれ、堆積して生じた低地で、最西端は砂堤（砂洲）地帯である。

加茂（2006）によれば、該当区域は明応今切決壊以前の浜名湖口で、セギ状湖口が窺われ、その後常時開口していた「帯ノ湊」に関係する地形・地籍名なども残されている区域である。

新居地内には崩落地点「検校谷」・「大欠」がある。その南側には、沿岸低地上に崩落崖からの土砂が二次堆積している。「検校谷」の下方では「文徳実録」に記載されている角避比古神建立跡地と考えられる「角避」、祭祠に関係したらしい「神田」という地籍名が見える。「大欠」南側の二次堆積区域は地籍の区割りから昭和の初期まで扇状地形を呈していたことが窺われる。大倉戸の中心地「芳野」から葬送道が「連臺場」に伸びていた。葬送道の北側が「道上」南側が「道下」、区画整理以前の地籍図は扇状地状の二次堆積を裏付け、「追出シ」「南アラコ」等の地名は確証となる。

(2) 該当区域概略 (図 1, 2, 3)

浜名バイパス：風浪の働きで生じ高まった海浜北区域（国有地）に汀線にはほぼ並行に建設されている。大倉戸インターは湖西市と旧新居町地境で旧国道 1 号線に接続している。

大倉戸集落：新居町（1960）には「今橋本ノ西ニ大倉戸村ト云小村アリ橋本ヨリ分ル村也」とある。大倉戸村は高師山海食崖の南麓（江戸期の東海道）に東西に延びる村である。この村に慶安 4 年（1721）創建された東新寺がある。

松山集落：南側に標高 5～6 m 程の松林（山）に村社「神田神社」が建立され、松林は両腕で村落を囲むような形になっている。村落の防災・保全のため先祖が築いた松山（「神田神社」付近の砂丘）の浜名バイパス建設・通過を阻止。

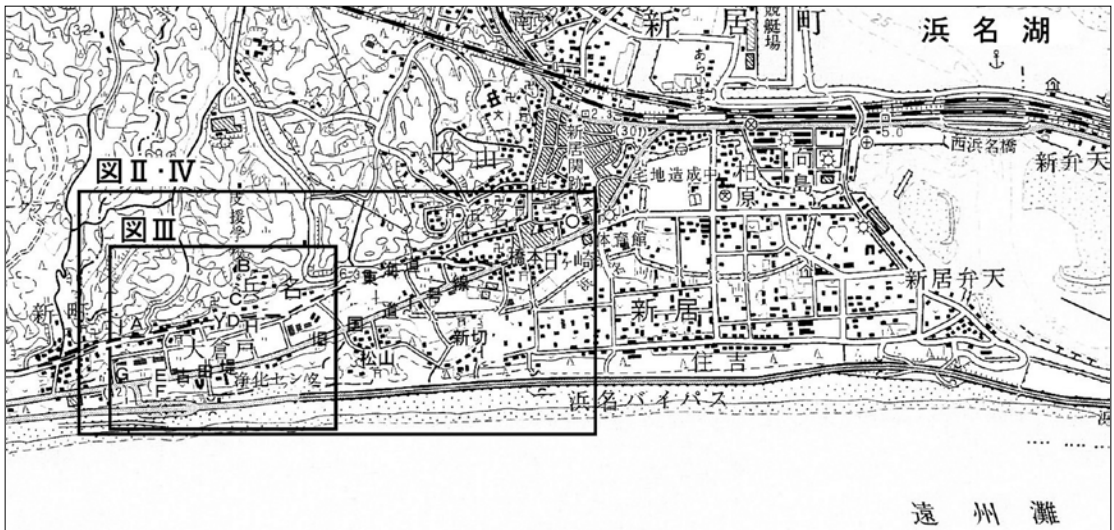


図 1. 該当区域の現（2008）地形図（国土地理院「浜松」5 万分の 1）より。A, 大欠。B, 検校谷。C, 東新寺。D, 立場。E, 連臺場。F, 水神社。G, 西田。H, 神田。M, 松山。S, 新切。Y, 芳野。O, 帯湊葎谷（西川）。

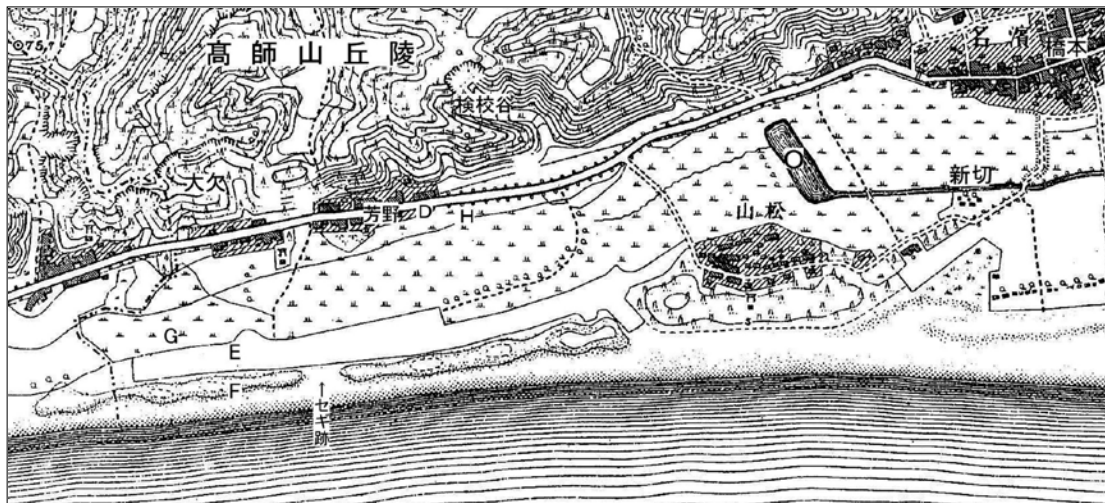


図2. 該当区域の明治23年測図地形図(大日本帝国陸地測量部「新居」2万分の1)より. 砂丘に低い地点(セギ跡)が何力所も認められる. A, 大欠. B, 検校谷. C, 東新寺. D, 立場. E, 連臺場. F, 水神社. G, 西田. H, 神田. M, 松山. S, 新切. Y, 芳野. O, 帯湊葎谷(西川).

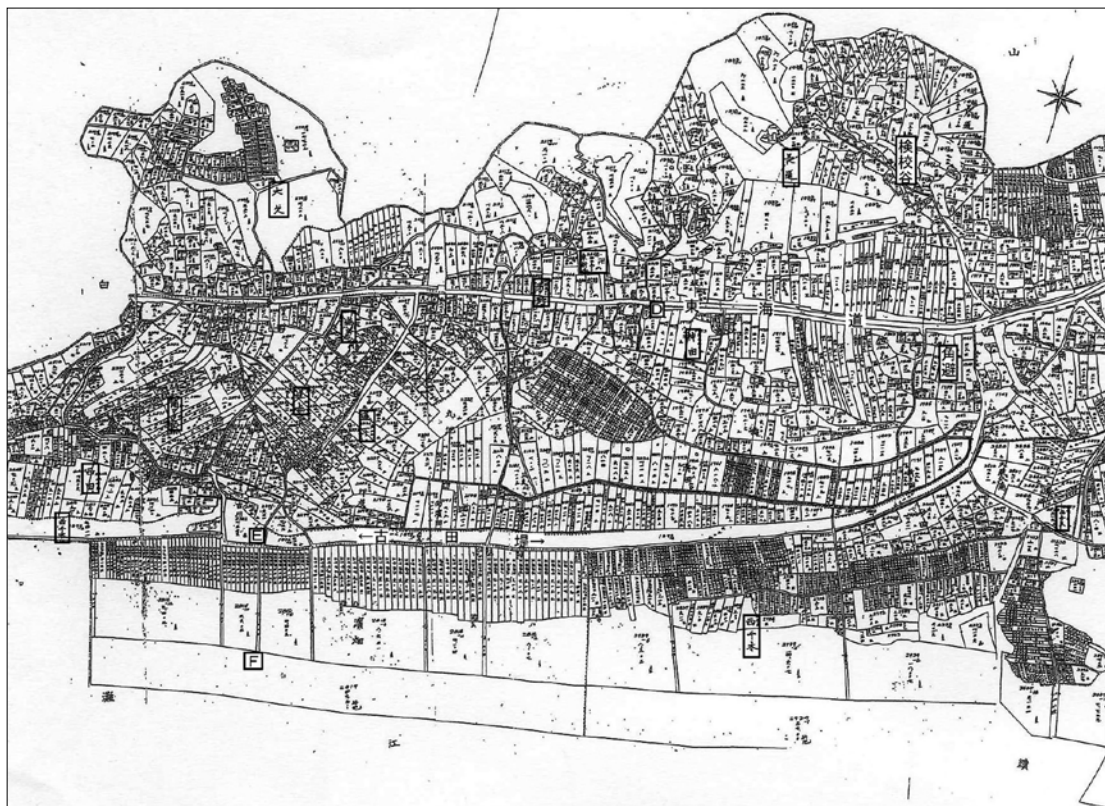


図3. 該当区域の地籍図土地宝典(1937)より. 古田堤跡が造成され, 図1の旧国道1号線となる. A, 大欠. B, 検校谷. C, 東新寺. D, 立場. E, 連臺場. F, 水神社. G, 西田. H, 神田. M, 松山. S, 新切. Y, 芳野. O, 帯湊葎谷(西川).

3. 解説

原文、素読、註釈、解説と併記して記述することにした（原文は2001年自著刊行の際撮影した原文書を分割して用いた）。

(1) 原文1素読(図4): 夫嘉永七年之秋年号改里安政元年登成る。其由来ハ日本国不残大地震所々大津浪ニテ人多ク死する事前代未聞之事ゆへに年号改る。嘉永七寅年ハ地震後に安政元年登なる。

註釈: 理科年表(国立天文台, 2010)には「1853年(嘉永5年信濃北部地震M6.5, 嘉永6年小田原付近地震M6.7)が記録され, 1854年(安政1年)には伊賀・伊勢・大和および隣国地震M7.25, 陸奥・三戸地震M6.5が記録されている。」

解説: 嘉永七年の秋年号改まり安政元年となる。その由来は日本国内所々で大地震・大津浪が発生し, 多くの人死んだので改元された。嘉永七寅年は地震後に安政元年となる。

(2) 原文2素読(図5): 然るニ其霜月四日四ツ時ニ大地震ゆり出し半時斗り不納, 地震納りて半時過て尔王かに津浪うち寄せ当濱表つつミ東出前ニテ切連, 水神社の東付切, 又西ニテ切, 都合三ヶ

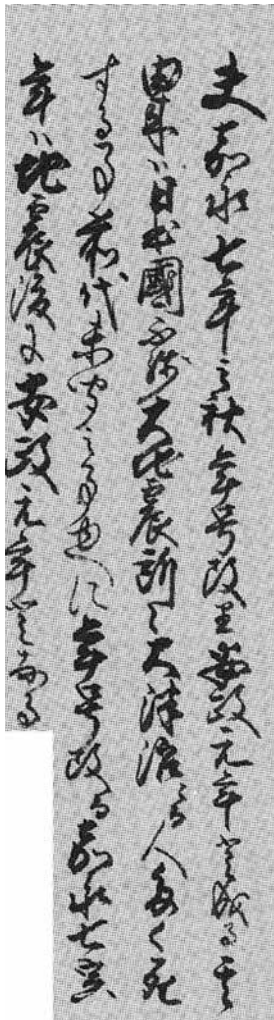


図4. 原文1.

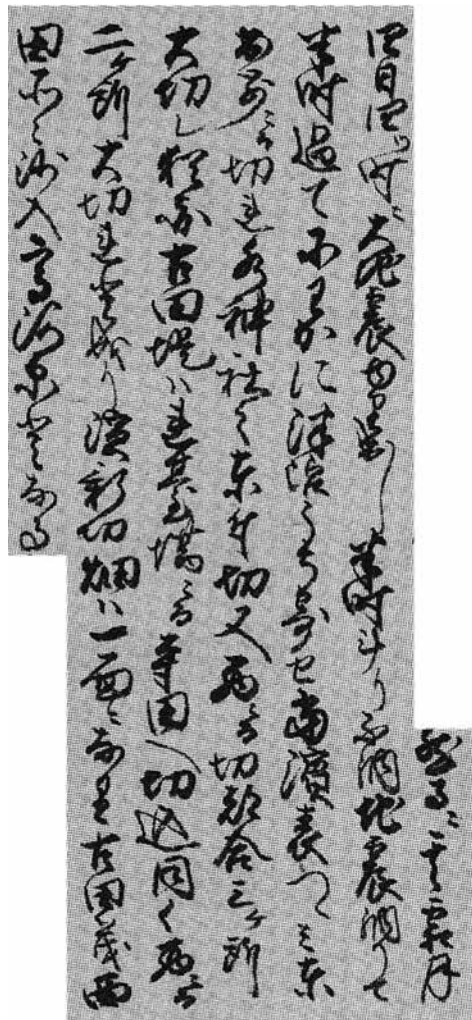


図5. 原文2.

所大切レ、猶亦古田堤ハ連臺場ニテ寺田ヘ切込、同く西ニテニヶ所大切連登成り、濱新切畑ハ一面ニ
なり、古田も西田所々沙入高河原登なる。

註釈

東出：地籍名、「西千木」(ニセギ) 付近。

水神社：「スイジンサマ」地引網漁の守護神。

連臺場：地元民は「タッチョウバ」(葬送の儀式場・土葬場) という。

西田：地籍名。

古田：昔からの稲田の総称、「西田」・「神田」等が含まれる。

濱新切：海浜の新開畑の総称、一部を「濱畑」という。

表浜堤とそれ以前の堤と砂堤が2列あった。「水神社」は最前列の砂堤にあり、「連臺場」辺りに稲
田を守る2番目の砂堤が東西に延びていた。

解説：然るに11月4日四ツ時(10時頃)に大地震ゆれだし
1時間(半時)ほど納まらなかった。地震が納まって1時間(半
時)ほど過ぎてにわかに津浪打ち寄せ、「スイジン様」が祀ら
れている当濱表の自然砂堤が「水神社」東側で2箇所、西側で
1箇所都合3箇所大きく切れた。さらに押し寄せた津浪は稲田
を守っていた「連臺場」通りの2列目の砂堤も、3箇所切れ込
んだ。そのため古田(昔からの稲田)の西側部分にあった「西
田」も所々砂が流入し、高河原になった。また「水神社」の東
側に開墾されていた「濱畑」は高低差が認められない海浜になっ
た。

(3) 原文3素読(図6)：村方ハ立場東ヨリ糸ミ口三筋四筋
出来、其糸ミ口ハ貳尺三尺有りて深さ王七尺又ハ壺丈位ハ知連
其余ハ不知。尤北がワの方ハ家の以多ミ茂少々なれ共南が王、
拾三軒斗り茂家々半潰となるなり。田畑糸ミ口ヨリど路水吹出
春事三尺斗り茂玉の様になりて吹揚る。

註釈

村方：大倉戸部落の中心地・「芳野」、東新寺が街道の北側
にある。

立場：東海道の茶屋。白須賀宿と新居宿の間の休憩地(現当
主加藤準次郎氏敷地)。立場の東側の稲田は「神田」。

解説：部落の中心地は「立場」東付近では地割れし、三四筋
できた地割れの長さは2尺~3尺(60cm~90cm)あって、深
さは7尺(210cm)又は1丈(3m)位見通せ、それ以上は分
からなかった。街道の北側の方は家の傷みは少なかったが南側
の家は13軒ばかり半壊となった。田畑の地割れから泥水が3

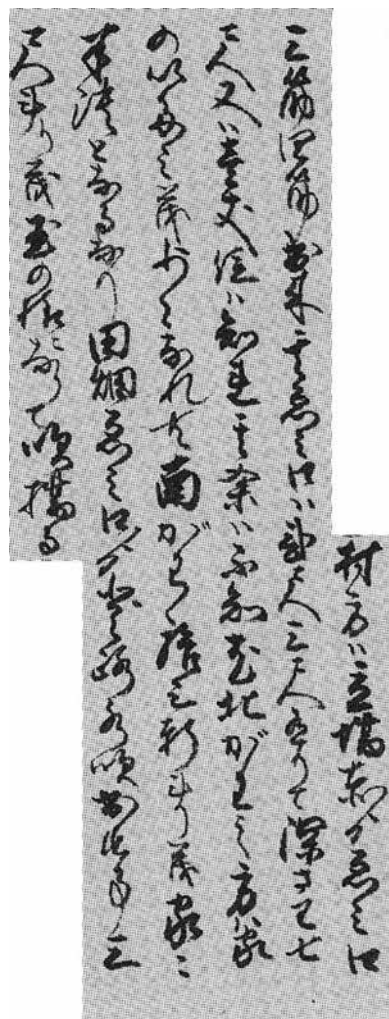


図6. 原文3.

尺（90 cm）ばかりも玉のように吹き揚がった（沿岸低地にあった「神田」等の田畑で液状化現象が起こったことが推定される）。

（4）原文4素読（図7）：其日ハ朝よ里晴天にてをだ屋かな連バ濱江出て居り舟も浮べてすでにか介ん登春る内ニ地震ゆ里出春事故早々ニか希来らん登志希るに皆々足不立古路ビ古路ビ，岡を見連バ大がけの崩る、沙煙り火事場の如く又濱邊を見連バ片濱迄の山々同く崩て沙介むりの立事火事の如くニ見ゑケレバ皆々大ニきも越つぶ志てこ志がぬけてハう人茂阿り，津くばりて休んで来る人も阿り，其さ王ぎ大方ならず，何分ニ茂津なミに恐れて皆々山ニ阿がりて見れば百束ぶんよ里山か雲か登思ハる、程の高浪打寄来る事三ツなり。尤当濱より東へ高浪下りて打ち寄せ介る故破そもかる志。

註釈

地引網：大倉戸には二組許可されていた。部落総出の漁業。

潮見坂：魚見の坂。カタクチ鯛の大群は海が黒紫色に見えた。新居橋本から田原迄の崩辺＝崖上は全て潮見坂。

大がけ：地籍名「大欠」。大倉戸地内高師山丘陵の海食崖の崩落崖。湖西市との地境付近の崩落が激しかった。

片濱：「今切」から「伊良湖岬」までを「片濱」。52キロ程あり、「片濱13里」と地元ではいう。

百束ぶん：粳付き稲10把まとめて1束、1束の厚味ほぼ40cm。粳束100束を積み重ねると約40m。ここでは浪の高さ。

解説：その日は朝より晴天にて穏やかな日和であったので、部落民総出で地曳き網を始め

た。濱へ出て沖合にこぎ出し、網を入れ始めた（許可されていた2統の内1統は網を入れ終わった）。そのとき地震が揺れだした。それ故早々にそれぞれ駆けだして丘に向かったが急いだため足が立たず、転び転び丘に向かった。村方の海食崖を見ると、「大欠」が崩れて砂煙が立ち、火事場のように見え、西に延びる海岸線を見ると「片濱」の崩辺が崩れて砂煙が立ち、火事のように霞んで見えたので、みんな大いに肝をつぶして、腰が抜けて這う人もあり、つくばりて休んで来る人もあり、その騒ぎは大

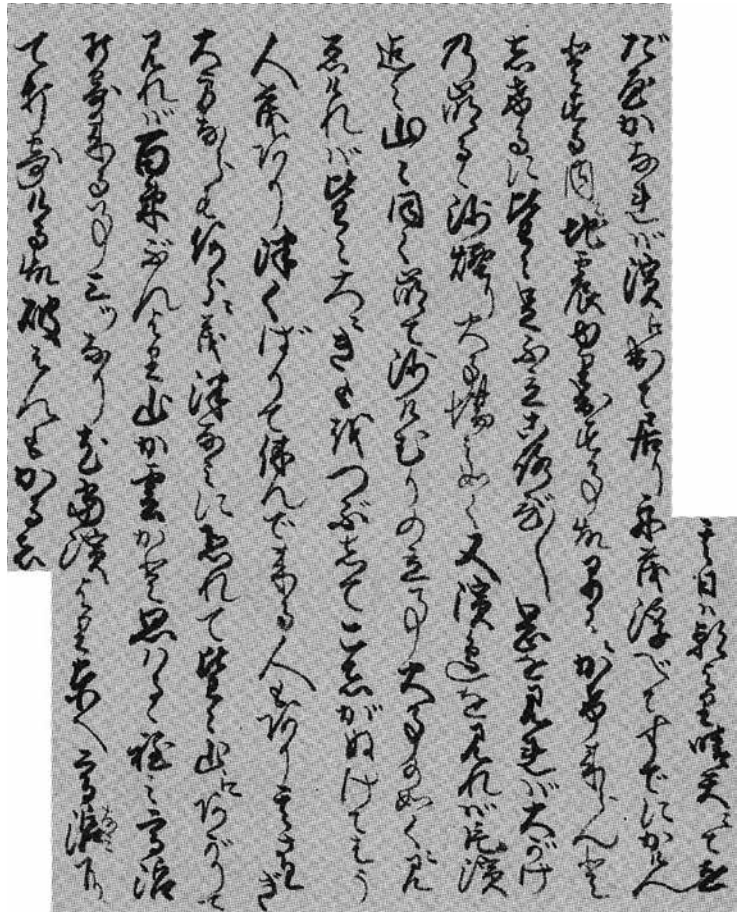


図7. 原文4.

きかった。何分にも津波に恐れて皆々山に上がりて見れば40 m位の山か雲か思われる程の高浪が三つ打ち寄せてきた。幸い当浜より東へ高浪が打ち寄せたので被害が少なかった。

(5) 原文5素読 (図8)：津なミ納りて皆々小家懸して山付ニ其夜を明春其間ニ知さ記地震ゆる事度々なり。五日になり介連バ互ニ見舞ニ行つ来徒、七ツ半時分迄ぎ王、登ゆふて東西へ走り廻る内に伊勢沖より鳴物春る事大がミナりの如く大地志んどふ志て飛ぶき鳴る古登徒ゝいて七ツ其鳴物近所へ来る様に聞へ介連バ何方の人々茂大ニ気を失ひ大かた山わかれて山津なミ成りと云人も有又山を吹出春音なり登云人も阿り老人女子供ハなき立大丈夫の男茂以可ゝ成る事やらん登皆十方ニくれて迷ひ阿るく事大かたならず。其内二日ハ暮る。

註釈

伊勢沖：地元では「伊勢沖」という言葉をよく使う。南西から気象が変化するため。

解説：津波が納まって、どの家も安全な山麓に小さな仮小屋を立て、その夜を明かす。その間に小さな余震が度々あった。翌五日になって、互いに見舞いに東から西に尋ね合い、夕方5時頃(七ツ半時分)迄ぎわざわざ言って右往左往していた。その間に伊勢沖(南西の海)より大雷のような音と共に大地が振動して響き渡った。午後4時頃(七ツ刻)のことであった。その大事変が鳴り物と共にこちらに来るように感じたので人々は気を失い、山が割れて山津波が来るのではないかとか山が土石流になって噴き出す音ではないかとか言う人もあって老人や女子供は泣き立て意気盛んな壮年者もどうなることだろうと途方に暮れて歩き回っていた。その内に日が暮れる。

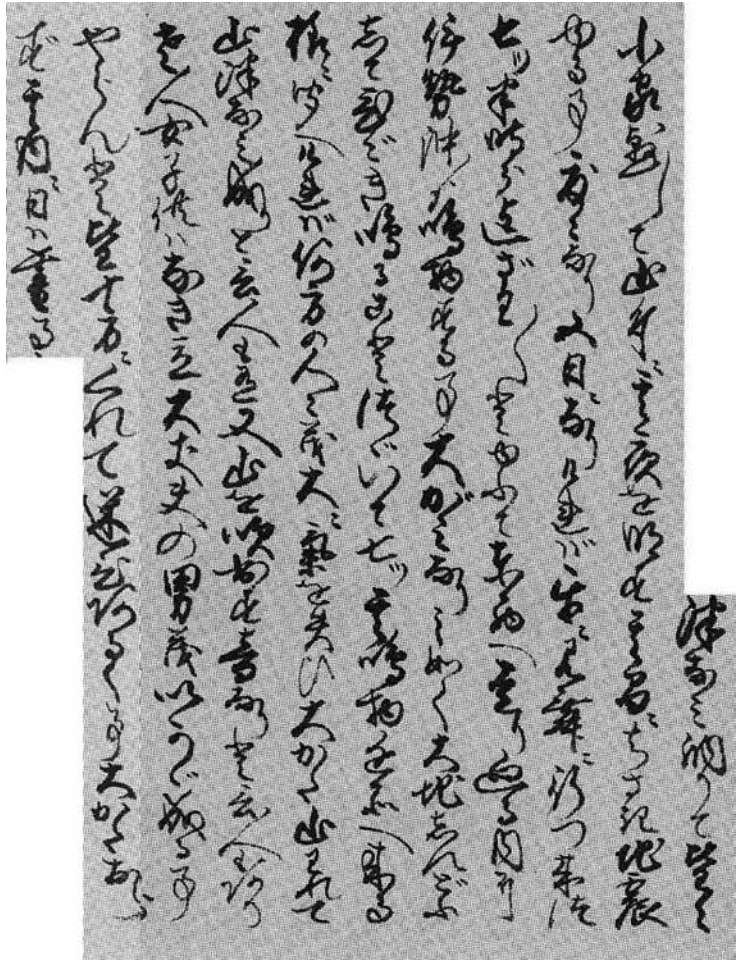


図8. 原文5.

理科年表(国立天文台, 2010)には, 1) 1854.12.23 (安政1.11.4) 『安政東海地震』 M8.4, 被害は沼津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い, 被害をさらに大きくした。2) 1854.12.24 (安政1.11.5) 『安政南海地震』 M8.4, 東海地震の32時間後に発生。「被害

地域は中部から九州に及ぶ」とある。

原文2では「4日10時頃（四つ刻）に地震発生とし、その時刻は網を入れたとき」としている。しかし浜辺漁民の漁労習慣を考慮すると、網入れが10時では遅すぎる。漁労は朝早くから始めるので、地引網入れは8時頃（遅くとも9時には網入れは終わっている）と推定する。『安政東海地震』は4日8～9時頃発生となる（年表にある発生時間差32時間）。

原文5には「翌11月5日五ツ刻大地震動・伊勢沖の鳴物」と記述されている。『安政南海地震』が11月5日夕方4時頃発生した」ことになり、発生時間差がほぼ一致する。

(6) 原文6素読(図9)：小家も又高イ所へ懸直もアリ諸道具俵物神仏を古・ニ置か志古ルつるし置いて只生た心ハなかり介る、地震ハ毎日毎夜ど、路が志てハゆる事数知連ず故小家に拾七八日居る人もアリ又不日三拾日暮者もアリ其内ニ雨天ニ成りける故皆々一同ニ家ニ入る者茂有半潰の者ハ志ばらくせどや住居の者茂有其中ニ互ニ見まひ手伝合て家を起して目出度我家ニ入て神仏を信心して家を清めみき越そなへてよふい、落付ける。

註釈

不日：「ひならず」と読み、「まもなく」と解釈。

せどや住居(背戸屋住居)：家の裏(背戸)に建てた掘立小屋

解説：仮の小屋を高い所に移し替える家もあり、日常使用する道具や羽俵や神棚や仏壇をここかしこに吊し置いて生きた気持ちはなかった。地震は毎日毎夜余震が続き、揺れることは数知れなかった。

仮小屋に拾七八日居る者もあり、又日ならずして(＝まもなく)三拾日も暮らす者もあり。その内に雨天になったので家族全員家に戻った者もあり、半壊した家主は裏庭に建てた仮小屋(背戸屋住居)でしばらく過ごす者も居た。その内に互いに手伝いあって家を起こして目出度く我が家に入って大掃除して神仏を信心して、家を清めて神酒を供えて落ち着いた。

(7) 原文7素読(図10)：尤此地震之前表と思はる、ハ其年之十月廿八日ニ八日の出ハ三尊ニをか

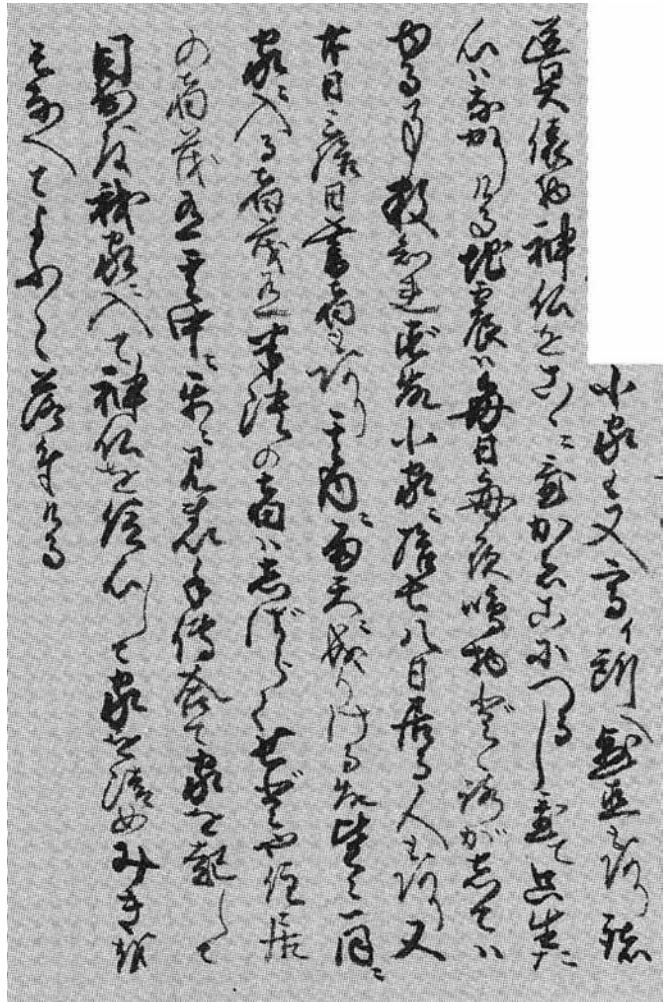


図9. 原文6.

めて其日一日ハ御笠有し事慥ニおがむ者所々ニ而ふ思議なる事かなと云て居り介るが後ニ大かた御知らセ登思ハる、ハ七日目ニ霜月四日大地震也。猶亦大地震三日前ニハ当濱沖少し西ニ当りてかミ鳴可登思う様ニど、路の鳴事一日ケ間也。是茂津浪可地震之前表登思ハる、依之此末人々右様之不思議有らバ神仏の御知らセ登相心得て村中云合て信心して皆々覚悟が可然登存る故東新寺現住真宗慥ニ眼前ニ見多る事乃百歩一をかな書ニ古々に残し置もの也。

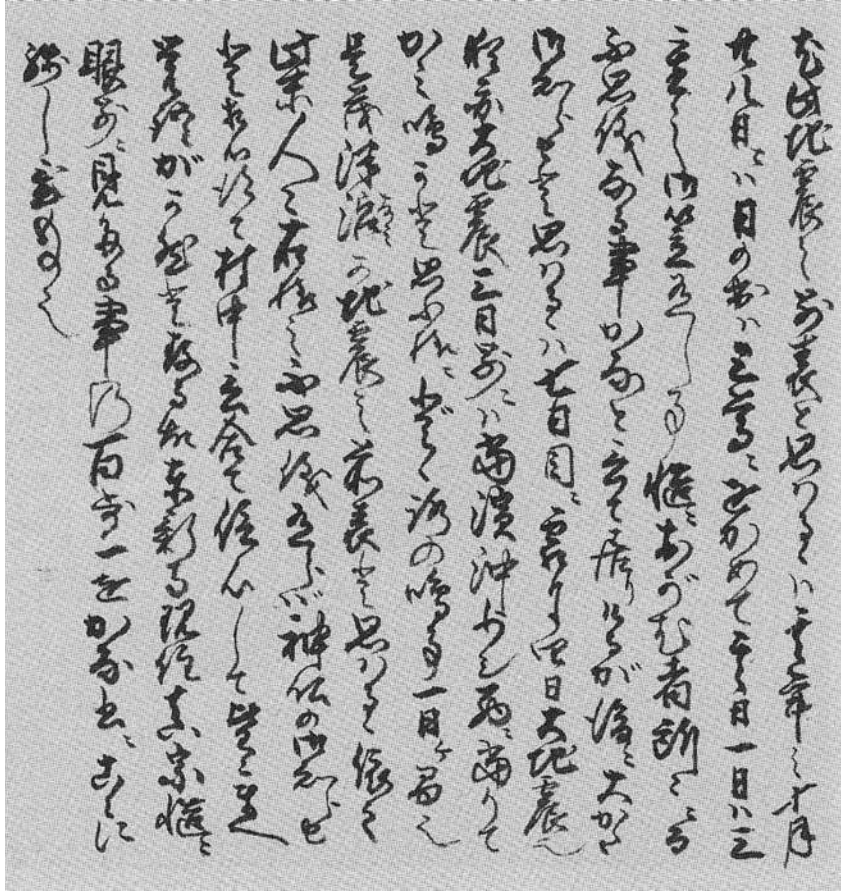


図 10. 原文 7.

解説：もっとも此地

震の前兆と思われるのはこの年の10月28日には日の出が三尊のように見えてその日一日中太陽が笠かぶりして確かに見上げる者不思議なる自然現象と言って居ったが大方の前兆と思われ、後日七日目11月4日大地震が発生した。猶又大地震三日前には南西の海で、雷かと思われるほどの海鳴りが一日中続いていた。これも津浪か地震の前兆と思われる。これからこのような自然現象が生じたら皆々神仏のお知らせと相心得て村中相談して信心し震災の予防の心構えをしておくことが大切であると信じるので、東新寺住職真宗が実見・体験したことのほんの一部分をかな書きで記し、残し置きます。

(8) 原文 8 素読 (図 11)

- 一 津浪ニ而濱方乃道具ハ有増流失破損志て難儀之所皆々出精して切々を集めて様々ニ商売出来る様ニ致春也此時ニ仁右衛門綱ハ潰申事
- 一 御関所 地震ニ而潰御立かへ登成る新居橋本村并新切大破損田所畑方大荒ニ成る 教恩寺潰連
- 一 地震之時ハ火を消春事第一なり右心得之た免近所之事を少々記るし置もの也 大倉戸村東新寺真宗後代江書置

註釈

濱方乃道具：地引き網の道具（櫓、綱、丸太、轆轤など）。

仁右衛門網：地震発生時に網入れが終わっていた1統。

解説

一、津浪で地引き網の道具は粗方潰れたり流され打ち上げられ難儀したが、部落民総出でかき集め修理し、再操業出来る様にする事ができた。しかし網入れした仁右衛門網ハ破損してしまった(地引き網は部落総出の漁労であった)。

一、関所は地震で潰れ建て替えとなった。新居橋本村と新切部落は大破損した。両部落の田畑は大荒れになった(松林の造成砂丘に囲まれていた松山部落(隣村)は被害がなかった)。橋本村の教恩寺は潰れた。

一、地震のときは火を消すことが第一です。近所の家にも気を配りなさい。

4. 補追：「新居橋本村并新切大破損田所畑方大荒二成る」の解釈について

両部落の南側に位置する松山部落(図12)被害の記述がないので、この付近の浜表堤は切れず、津波により、浜名湖側の入江から、地元で浜名西川と呼ぶ川沿

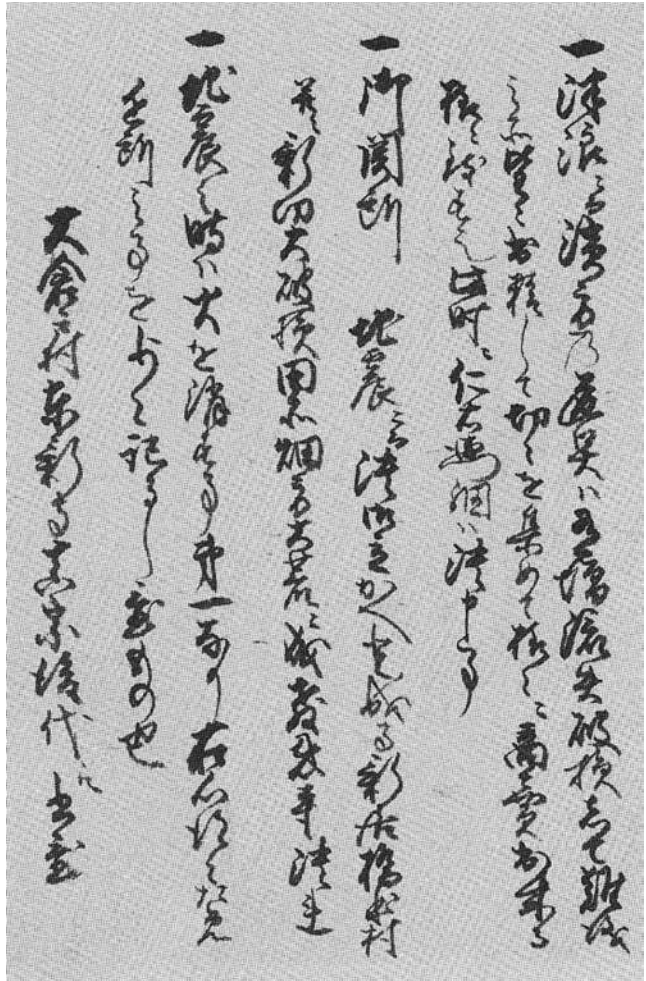


図 11. 原文 8.

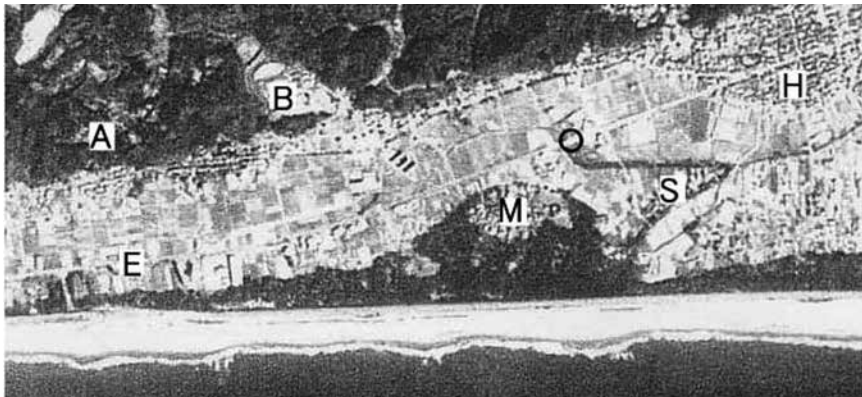


図 12. 該当区域航空写真. M (松山部落) は松林の砂丘 (海拔 5 m) で抱え込むように保全されていたので被害はなかった. H (橋本村: 海拔 2 m) は地震で大破損. 橋本村の田畑と S (新切部落) 及びその田畑は海拔 0 m ラインで浸水し、大荒れになった. 伊勢湾台風 (1959) では松山部落の西側の砂堤 (浜表堤) が少々浸水した (参考).

いに、旧浜名湖口（帯湊跡）の池沼（呼称西川）に向けて逆流した津波が、船溜まりなどで集めた浮遊物を田畑に置き去ったため、「橋本村・新切部落の田畑が大荒れになった」という記述になったと解釈すべきと考える。

引用文献

- 新居町 (1960) : 新居町史 史料編 1. 新居町, 213p.
大日本帝国市町村地図刊行会 (1937) : 新居町土地宝典.
大日本帝国測量部 (1891) : 2万分の1地形図「新居」.
加茂豊策 (2001) : 浜名の渡りと鎌倉への道. 自費出版, 199p.
加茂豊策 (2006) : 明応（今切決壊）前・後の浜名湖南部の地形. 静岡地学, 94, 39-54.
国土地理院 (2008) : 5万分の1地形図「浜松」.
国立天文台 (2010) : 理科年表 23年. 丸善, 1,064p.
静岡県 (1996) : 静岡県史別編 2 自然災害誌. 静岡県, 808p.